

飯田泰三 山領健二編「はせがわにょぜかんひょうろんしゅう長谷川如是閑評論集」岩波文庫、岩波書店 1989年6月16日刊を読む

時代と教育 ―一日一題―

1. (1) 先日新聞に、「廃物利用」の宣伝が利き過ぎて、子供たちが、その目的から盗みをしたというような記事を見た。

(2) これはそんな動機からかどうか、また果して盗みの意志さえあったのかどうか、けいけい軽々には何ともいえないことだが、とにかくそこに現代の教育の欠陥がうかが窺われるように思われる。

2. (1) 明治初年の日本は、封建的の狭い国家主義にとら囚われた教育を更新するために、むしろ近代市民的の個性を育てる教育が要求され、同5年の文部省訓示においても、相当極端に、個性の発展に基礎する近代的科学主義教育と近代的産業主義教育とが高調されたが、それは全く当時の世界的態度で、時代の要求としては当然であった。

(2) しかるに最近では、その反対に国家主義的、民族主義的教育が高調されているが、これまた今日の世界的の態度として時代の当然である。

3. (1) 時代の興奮が人間的意識を極端に走らしめることはやむをえないが、明治初年の教育は、その理由で、個性的教育に偏し、今の教育は、同じ理由から、集団的教育に偏せんとする傾きがある。

(2) 前者は「個」に失し、後者は「全」に失したのである。

(3) 両者の場合ともに、実際の教育がそう極端に偏したわけではないが、もっと重点を置くべき所を軽んずることはあった。

4. (1) 真の教育には、時代の反省がある。

(2) じゅきょう儒教が戦国せんごくの支那シナにおいて「詩、書、礼、がく楽」を基本教育としたことは、よく教育の本義を示している。

(3) 個人主義の時代こそ、集団的生活の理想が高調されねばならぬのであり、集団主義の時代こそ、個性の理想が高調されねばならぬのである。

5. (1) 大事は小事になり、非常時は尋常時になるというのは、個人の生活の原理であると同時に、歴史的発展の鉄則でもある。
- (2) 尋常人が大きい目的のために小事を忘れるのはやむをえないが、教育だけは断じてそういう忘却の仲間入りをしてはならぬ。
- (3) 大きい道徳を教えねばならぬ時ほど、小さい道徳を教えることを忘れてはならぬのである。
6. (1) 今の教育は、大きい道徳を大きい声で教えることを誤らないだろうが、その大きい道徳を呑み込んだ人間に、彼らの日常の行為と心意しんいとのより平凡な準則を確かに与えているだろうか。
- (2) それを彼ら自身の自然として体得させることに成功しているだろうか。
7. (1) 日本の昔の武士教育は、その意味の個性的な体得に偏するかと思われる位、自己完成に重点を置いた。
- (2) 「全」のために「個」を無視したといってもいいような時代において、厳格に個性の完成を求めたのであった。
- (3) このわが国の武士教育の態度にはたしかに不朽の教訓がある。

(1938年)

<コメント>

「断じて行わず」を座右の銘に、あくまで「見る」立場から生涯を一管の筆に託して生き通した文明評論家長谷川如是閑の教育論。全体重視の武士社会で個性の完成を目指した武士教育を高く評価する視点は、まさに識見といえる。是非、御一読を。

— 2016年2月4日(木) 林 明夫記 —